

平成 18 年度「五三会・学生大賞」審査講評

広島工業大学建築・環境系同窓会「五^{いつ}三^み会^{かい}」
五三会顕彰制度認定委員会 梶山 孝之

「五三会・学生大賞」の主意

「五三会・学生大賞」は、広島工業大学建築・環境系学科に在籍し、その間の集大成としての卒業研究の内から卒業設計を対象とし、それらを評価し「五三会・学生大賞」と称して優秀なるものを表彰し、これを通じて卒業される学生諸君を応援することを目的としています。

そこには、「将来とも、建築や環境に関して意欲的に取り組んで欲しい！また、将来において、何らかの動機付けの一役にもなれば幸い！」との思い、願いから、「五三会」の制度として 11 年前に設けられました。

今年度は、2 月 13 日に環境デザイン学科の卒業設計を、2 月 19 日に建設工学科建築工学コースの卒業設計を予見した上で、併せて全卒業設計に関する議論を行い、最優秀なるものを選定しました。

審査の視点

社会性の有無と是非について

この「社会性」の定義付は多岐に渡り複雑で難解ではあるが、少なくとも共通に予測できるのは「お互いに理解し合える」ことを前提にした観点であり、さらには、設計の「客観性・意味性・目的性」を示唆している大切な視点と考えます。

また、設計に臨む際のこの視点は、設計者自らの課題として認識し得ているかどうかの是非がその内実レベルに即応して設計へと導引する原動力と成り得るものと考えられます。

建築の設計力、または表現力

建築の設計とは、抽象（社会性）を具象化（設計）する一連の総合的作業であり、結果としての成果はこの設計力・表現力によって決定付けられます。

その建築的表現の手段として主旨文・作図・模型・等があり、ここでは設計主旨との確に連関したより明解で熱意ある美しい表現が期待されます。

審査講評：総論

設計対象の“場”を範囲別・規模別に大別すると、二通りの方向性が見受けられます。

ア 集住体としての環境提案：やや広い範囲を対象とした生活環境の空間化を提案するもので、特に環境や自治意識の問題が大きく問われる現代社会では、意義のある視点と思われれます。しかし、大方のものは、相当の調査・分析がされている様子にも関わらず、視点が拡散し収束性に欠け、建築的表現が十分に成し切れず浅いレベルに止まっている点が目に付きました。恐らくは、それらの一因として、設計を大きく規定するであろう前提条件（生活観・意識・経済・等々）が、明確に把握され得ていないように思われれます。

イ 単一体としての建築提案：従来通りのいわゆる個的な単体建築の設計です。計画全体への目利きがあり建築化への集中がしやすく、より完成度の高い提案が期待出来る方向性です。しかしながら、上述の社会性（普遍性）への視点が欠如し、形に至るまでの過程とその根拠が不明確で、形態操作に終始しているものが多く目に付きました。

もう少し周辺環境との関わりを重要視するなど、普遍的で拡がりのある提案を期待します。

近年の作風傾向として、気掛かりな点があります。

ア 社会性への視点：提案の裏付けとなる社会的根拠・意味・価値付が希薄なためか、結果として内容が表層的・短絡的あるいは形態操作的になりがちで、目的（社会性）と手段（建築設計）が不明瞭で説得力に欠ける作品が多々目に付きます。

イ 設計への原動力：多くの学生の視点は、一見広範囲でバリエーションに富んだ多様な視点や方向で臨もうとしていますが、主旨が拡散したまま的が絞りきれず不明解で曖昧です。大方の設計主旨は一般論レベルに止まり、設計動機となるべく自らの問題として捉え切れていないためか、結果として建築設計という領域にまで昇華され切れていないものが多々目に付きます。

審査講評：各論

今回の審査では、設計主旨の内容と建築的表現までの一連に突出している卒業設計が見当たらず、短時間の中での選定に当ってはすこぶる困難を極めました。

そんな状況の中でも、各審査員から推薦され、比較的評価を得たのが次の6点です。

「DREAM CIRCUS」

飴野 恭子

一見、集まることへの期待や効果が伺えそうな、集住体の提案です。ただし、周辺環境との整合性が乏しく、集住効果として“お互いが解り合えそうな”建築的表現が乏しいためか、計画地外に対してややもすると閉鎖的な観すら感じます。また、表現スケールが小さ過ぎて詳細が不明であり、建築的計画性に乏しい点が感じられました。

「みんなのイエ」

富廣 順子

どこにでも在りそうな場所の設定と、誰もが気づきそうな現実的な状況をテーマに、誰もが納得しそうな等身大でリアリティのある提案です。ただし、計画の是非を大きく左右するであろう建築以外の諸条件（地権・意識・時の流れ・等）が複雑多岐に渡って横たわっているためか、建築化レベルに達し切れず希薄さが見受けられません。

「-pqhouse-」

相川 晋吾

学生にとって極々身近なテーマであり、建築的にも上手く処理された提案です。特に、分棟された狭間に配された1階の開かれたOPEN SPACEは、主旨に良く沿っています。ただし、地域に密着集住するという主旨からして、各棟の位置・高さの関係、駐車場の配置・等に対する周到性が要求され、周辺環境とのさらなる関わりを考慮すべき！との意見が出されました。

「白壁の町」

平林 由衣

歴史的景観である白壁の街並みを観光地として保存すべく提案されたもので、その身近な設計主旨と洗練されたデザイン性との間に伺える、

素直な連続感と整合性が評価されました。

ただし、既成の概念あるいは形態言語（白壁・勾配屋根・ピロティ・等）に頼り過ぎた観があり、双方が同次元であるが故に、やや建築的表現がまとまり過ぎておとなしくなっている点が残念です。

「50 floors - connect. - 1 floor」

中濱 弘高

つい最近、どこかで見たようなファサードデザインにも関わらず、空間構成が概念的で、シンプルかつ大胆な提案です。既成の建築形態言語を多用しながらも、建築的な完成度が高く、審査員の注目も集まり、最後まで「次席」として印象に残った提案です。ただし、周辺環境との関わり・整合性に乏しく、街に開かれた時の効果に少し疑問が残ります。

平成18年度「五三会・学生大賞」

「the other side of wall」

花岡 芳徳

空間構成が巧みで造形力があり、卒業設計として完成度の高い提案です。この観点で、他のものよりやや卓越性があるとの評価を集め、最終的に「五三会・学生大賞」として選ばれました。設計主旨に示す“機能と機能の間のデザイン”に着眼し、その空間化に挑戦する姿勢と、建築化された“壁”の扱い方とその在り方に期待の出来る提案です。ただし、周辺環境との関わり（場所性）に乏しく、形態に至るまでの過程において、その必然性・客観性が見当たらず、やや説得力に欠けている点で審査途中では賛否両論がありました。

「あとがき」

複雑で、また情報社会と称されて久しい現代という時代において、建築設計に臨んでは特に、概念と感性あるいは設計主旨と表現……といった裏表の関係にある不即不離な両方向からの即応的アプローチが必要不可欠です。

そのためにも、社会という抽象を等身大の自分の問題として捉え、先ず自分自身に問い、さらに社会に問い返ししながら、今後とも一步一步自分の可能性に向かって進まれることを期待します。

御卒業、おめでとうございます！